

藩末期における金沢城下の街路構造

金沢大学工学部 正会員 竹田 恵子

金沢大学工学部 正会員 川上 光彦

Characteristics of Road Network in Castle Town of Kanazawa at the End of Edo Period

By Keiko TAKEDA and Mitsuhiro KAWAKAMI

This paper deals with the analysis of the characteristics of road network in the whole area of the castle town of Kanazawa at the end of Edo Period. The data is collected from "Kanazawa Kusazu" and "Kanazawa Sokuryo Zuseki", each of which is a survey map for every streets in the whole area of the castle town at the end of Edo Period. The length, width and gradient of all roads in this town are calculated and analyzed, which is related with the classification of roads and the residents' classes of roadside area.

【キーワード : 江戸末期、城下町、街路、金沢】

1. はじめに

街路¹⁾や街路網の整備計画を進めるに際しては、既存の街路がもつ空間的構造や脈絡的構造を考慮する必要がある。特に、都市整備にアメニティが重視されるようになった現在、幹線道路の整備に伴う既存の市街地との関連、歴史的な街路景観の保全などが重視されるようになってきている。しかし、これまでの街路整備や路線計画においては、既存街路のこのような構造を反映した計画整備のための方法論が十分確立されていない。

歴史的市街地における街路網は基本的に藩政期からの街路が継承されてきているものが多い。また、街路の空間的構造についても、自動車交通の発展にともない適宜拡幅、新設されてはいるが、特に非戦災都市においては藩政期の街路構造がそのまま残されている場合が多い。本研究で対象としている金沢市旧市街地においても、都市計画道路が新設されてはいるものの、戦災を免れ藩政期の街路が残されたため、基本的に藩政期の街路構造を継承している地域が多い。それゆえ、既存の街路構造を反映した街路整備計画を行うためには、既存街路について詳細な分析を行い、街路の空間的構造や脈絡的構造を明らかにする必要があると思われる。

本研究では、以上の問題意識のもとに、金沢を事例対象とし、藩政期の測量データにもとづいて、城下全域の街路について定量的な分析を行い、街路の空間的な構造や街路網の脈絡を明らかにすることにより、これからの街路整備計画立案のための基礎資料を提示することを目的としている。

藩政期の街路形態に関する研究については、これまでも種々のものが行われてきている。矢守は、城下町の都市計画について、その成立時代、地理的要因などから、城を核とした街路計画や町割りについて分析し、各城下町の分類を行っている²⁾。そこでは主として「単核都市」³⁾である中小城下町の分類を行っている。大規模な城下町では、都市の形成過程が長期に及ぶことや、広域なために地形の影響を受けやすいことなどから、単純な都市タイプに分類できない。この点について、矢守は、金沢、仙台、和歌山等比較的大規模な城下町を「多核のプラン」と位置づけ、城を単一核とした単純な分類では説明できない複雑な街路形態を有する都市としている。また、幅員の面から街路計画の考察も行われており⁴⁾、一部の城下町を例に、幹線の方が岐線より幅員が広いこと、侍屋敷地区においては屋敷規模に相応した幅員をもつこと、時代が後期になるほど幅員が

広くなることを述べている。金沢の例では、城郭の周囲には総構堀が設けられ、堀に沿って街路が形成されていたが、それら「城郭を囲む環状線」と平土、足軽屋敷地区の街路幅員について一部示されている。このように、矢守は日本の城下町の成立過程をもとに、その都市プランを分類し、街路幅員や敷地面積等を分析することにより、城下町の法則性を見出そうとしているものと考えられる。しかし、各都市の街路に関する数値的な分析については、都市内全街路を網羅的に分析しているわけではなく、主要街路の数値を代表値としているにすぎず、定量的な分析がなされているとはいえない。一方、油浅は、正保城絵図を資料として現在の地図上に復元投影し、個々の街路構造の数値的なデータを分析することにより、城下町の面積規模、道路幅、交差点の形態と密度について各城下町の比較、分析を行っている⁵⁾。しかし、資料の関係上、ほとんどが200ha前後の比較的小さい城下町が対象であり、幅員については絵図に記入されている15の城下町のみ分析であり、各城下の街路幅員についてもデータ数が少なく全域的な分析は行われていない。大規模な城下町としては、金沢は分析対象外であり、唯一大きな城下町である仙台に関する分析では、城下町面積と道路の交差点形態の分析にとどまっておき幅員に関する分析は行われていない。また、島村は藩政期における金沢の街路や町並みを対象とした分析、考察を行っている⁶⁾。しかし、その主たる分析対象は町家を中心とした家屋構造や敷地割りについてであり、街路については主要街路の幅員と街路線形、交差点形状、広見形状について述べられているが、数値的に詳細な分析は行われていない。本研究においては、藩末期に作成された測量地図の資料を用いて、金沢城下全域⁷⁾の街路すべてを対象に幅員、延長等の数値的なデータを分析し、街路種類、街路形態、沿道居住地との関係を指標として定量的に明らかにしている。これまで1つの城下町について、すべての街路を対象に藩政期の測量データを直接分析したものではなく、特に比較的大きな城下町である金沢における全域の街路の空間的な構造とその脈絡を明らかにすることは、歴史的市街地の街路構造を把握するための事例研究として有用であるものと思われる。

2. 用いた資料と調査の方法

資料は「金沢草図」と「金沢測量図籍」、「金沢測量図籍並草図目録」及びそれらの説明書といえる「金沢御絵図仕立方術書中」⁸⁾をもとにしている。これらはともに文政3年(1830)に描かれた金沢城下の地図である。「金沢草図」は城内と城下計21枚の地図によってできており、中に街路の形と測点⁹⁾番号が記されている。この番号から「金沢草図」上で採出した測点を、「金沢測量図籍並草図目録」により「金沢測量図籍」から各種のデータを得る方法をとっている。「金沢測量図籍」は、全41巻からなり、幹道、枝道等街路の種類別に描かれている。「金沢御絵図御用方覚書上」によると、実際の測量作業は文政5年(1822)正月から同11年(1828)6月である。ここから得られるデータとしては以下のものがあげられる。①隣接する2つの測点間の距離(単位:間、小数第2位) ②隣接する2つの測点間の方位(十二支) ③隣接する2つの測点間の高度差(単位:度) ④各測点からの街路上の角などの地点や構造物までの距離、方位 ⑤街路に隣接する構造物や門など。

資料によると、街路は37本の幹道と17網の枝道に分類されている¹⁰⁾。そこで用いられている測点数は合計5,107点である。分析に用いた指標は、街路の種類、幅員、勾配、街路形状、沿道の居住地種別などである。これらを整理して、街路の種類別にその特性を明らかにしている。

上記資料のうち、幅員はその表記方法から3種類に分類した。直接幅員を表しているもの、街路中心線から片側しか表されていないもの、街路端部へ測点から方位と距離が記入され放射状に測量されているものである。分析に用いられている幅員はすべて直接幅員を表しているもののみの集計である¹¹⁾。街路延長はすべて測点間長を用い、全長を求める場合には各測点間長の和とした¹²⁾。街路の種類は、街道、往還、幹道、枝道とした。なお、街道、往還とは、金沢城下の主要5街道を示し、幹道に含まれる。幹道、枝道の区別は資料に基づいている。街路形状は図籍上から判断し、一般道、坂道、広見、袋小路、階段、橋・その他を区分した。なお、坂道は「金沢市史」¹³⁾に記載されているもので図籍上で確認されるもの、および、10度以上の勾配が3測点

以上連続しているものとした。また、広見¹⁴⁾は街路の中で周辺よりふくらみをもっているものをすべて広見的部分としてみなし、ここでは単に広見と称す。袋小路は、幹道・枝道から枝分かれした通り抜けのできない一本道とした。沿道の居住地種別は、八家上屋敷、八家下屋敷、人持組上屋敷、人持組下屋敷、平士居住区、足軽組地、本町、地子町、相对請地、寺社地、その他、として区分した¹⁵⁾。

3. 藩政期の街路網の全体構造

図-1に、文政期における金沢城下の街路網図を示している。この図は、「金沢草図」、「金沢測量図籍」などをもとにして作成された「金沢城下町絵図」¹⁶⁾をもとに街路種類別に作成したものである。金沢城は、南東から北西にほぼ並行に流れる浅野川、犀川と、南東の小立野台地に囲まれた中心部に位置している。図から金沢の街路における骨格ともいえ

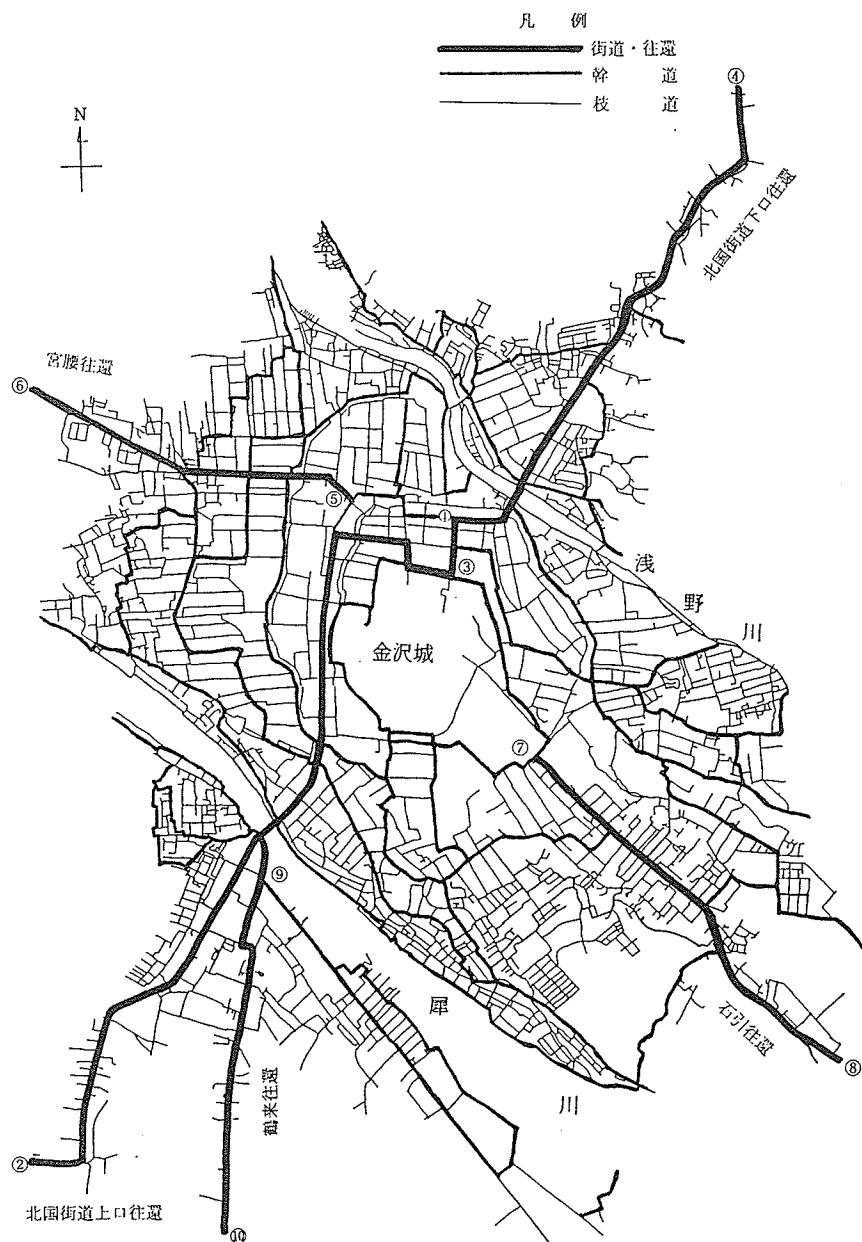


図-1 文政期(1830年頃)における街路構造(「金沢城下町絵図」に加筆、修正)

る北国街道上口往還（幹道二、図中①-②）、北国街道下口往還（幹道三、③-④）、宮腰往還（幹道四、⑤-⑥）、石引往還（幹道七、⑦-⑧）、鶴来往還（幹道八、⑨-⑩）が、城を中心に放射状に広がり、その他の幹道が、城を幾重にも環状に取り囲んでいることがわかる。また、中央部ではその間を縫うように、枝道が一定のまとまりごとに格子状にほぼ整然とした形状に並んでいる。いわゆる「七曲がり」と呼ばれるような曲がりくねった街路は中心部にはあまり見られない。それらは、2つの河川沿いとその外側、小立野台や城下末端部などに限定されている。これらの地区においては、相对請地などによって城下町の膨張期において田畑の畦道が継承されたことや、地形による影響が大きいと思われる。ただし、あまり監視の目が行き届かない城下末端部においては、非常時における敵の進入に対する配慮から設けられた街路形状部分が含まれている可能性はある。金沢が他の城下町ほど格子状に整然とした街路形態となっていないことにはいくつかの理由が考えられる。ひとつは、矢守が述べているように「新封の譜代大名によって一挙に計画的に建設された城下町ではない」¹⁷⁾ ためである。隣接する城の廃止などによる家臣団の帰住や大火などを契機に数回の城内、城下の都市改革を行っている¹⁸⁾。また、都市規模が他の城下町にくらべて非常に大きく家臣の階層構造も複雑化されていたことや¹⁹⁾、河川、台地など起伏に富んだ地形の影響も大きいと考えられる。

4. 街路形状別分析

城下における街路の種類別にみた各指標値を表-1に示す。全街路の延長は、104,530間（約190.0km）である。平均幅員は1.77間（3.22m）であり、延長でより長い枝道の値に近似している。幹道、枝道別にみると、幹道は2.25間（約4.09m）である。図-2に幹道の地図、表-2に各幹道別にみた値が示されているが、平均幅員は2.25間（4.09m）で、最大値は幹道7の4.25間（7.73m）、最小値は幹道37の1.00間（1.82m）である。幹道別の平均幅員のばらつきは大きい。城から遠い幹道ほど幅員が狭くなっていることがわかる。例外的に縁辺部で広い幅員となっている幹道27は、小立野寺院群のひとつ

である天徳院を取り囲んでいる街路である。一方、各枝道網別にみた値が表-3であるが、平均幅員は1.52間（2.76m）で幹道の平均値よりかなり狭い。あまりばらつきはみられずほとんどが1.0間（1.82m）～1.5間（2.70m）内に収まっており、ほぼ均一となっている。

街路面積は、全延長と平均幅員を単純に掛け合わせることで推定したものであるが、191,568坪（63.33ha）である。これは城下町全体の居住地面積803ha²⁰⁾のおよそ7.9%に相当する。幹道の

表-1 道路種別の各数値の比較

	幹道	枝道	全体
全 長 (間)	42,434	62,095	104,530
平均幅員 (間)	2.25	1.52	1.77
面積 (坪)	97,478	94,090	191,568
広見数 (個)	174	221	395
単位長当広見数(数/1,000間)	4.10	3.56	3.78
坂全長 (間)	1,209	963	2,172
坂平均延長 (間)	134	88	109
坂平均幅員 (間)	1.35	1.32	1.33
袋小路全長 (間)	—	14,054	14,054
袋小路平均幅員 (間)	—	1.31	1.31

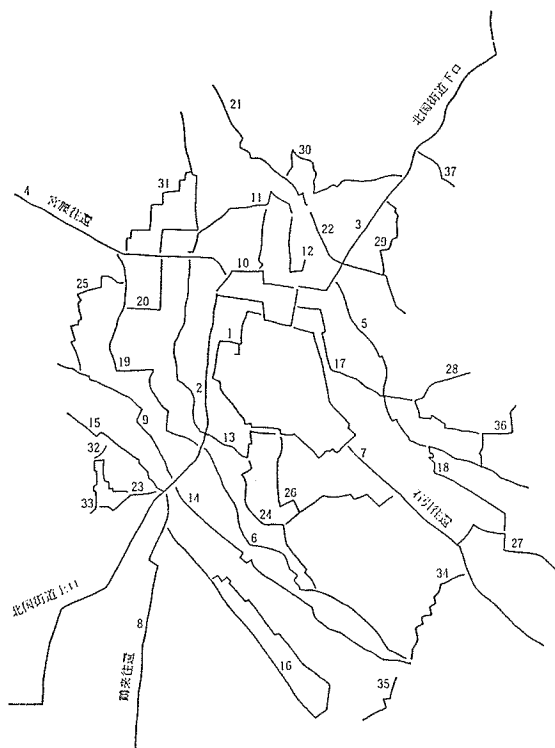


図-2 金沢城下の幹道

面積は97,478坪（32.22ha）、全居住地面積の4.0%、枝道は94,090坪（31.10ha）、3.9%と、全延長は枝道が幹道のおよそ1.5倍、平均幅員は幹道が枝道のおよそ1.5倍であり、街路面積は両者ほぼ等しくなっている。

広見は、立地上の種類としては、橋に隣接するもの、交差点に属するもの、2交差点間に位置するもの、袋小路に属するもの、坂道の途中や前後に位置するものがある。これらは戦略的につくられたものや自然発生的に形成されたものなど様々であると思われる。広見数は城下全域で395箇所存在する。上記の全街路延長を考慮すると、1,000間あたり3.78箇所つまりおよそ265間（482m）に一箇所の割合で広見が存在することになる。幹道の広見数は174箇所、1,000間あたり4.10箇所、約244間（444m）に1箇所、枝道では222箇所、1,000間あたり3.56箇所、約280間（509m）に1箇所の割合となり、単位距離当たりの広見数は幹道の方が多くなっている。

坂道として対象としたものは20箇所であるが、全長は2,172間（3,949m）である。これは全街路の全延長の約2.1%にあたり、その平均延長は109間（198m）となる。幹道が134間（244m）、枝道が88間（160m）とかなり幹道の方が長い。坂の平均幅員は1.33間（2.42m）であり、全街路の値より0.44間（0.80m）程狭くなっている。勾配は一本の坂道でもその測点間によりかなりばらつきがみられたが、各坂道の平均勾配は、最小で0.52度、最大で15.65度、平均で8.85度となった。

袋小路は枝道にしかみられない。全長は14,054間（25,550m）で、これは全街路延長の約13%を占めている。また、平均幅員は、1.31間（2.38m）であり坂道の値とほぼ等しい、両者より単純に求めた袋小路の面積は5.97haであり、これは城下面積のほぼ0.7%にあたる。

5. 階級別居住地と街路構造

藩政期は階級別身分制度がはっきりとしており、その居住地も城下町の防衛を考慮するなどして計画的に配置されていた²¹⁾。そのため、その居住地を通る街路の線形や幅員もその階級によって裏付けされた特徴をもち、居住地によって街路構造が異なる。

表-2 幹道に関するデータ

幹道	測点数	延長（間）	平均幅員（間）	面積（坪）
1	4	1,853.70	3.56	6,599.17
2	33	1,666.26	3.32	5,531.98
3	26	2,444.77	3.62	8,850.07
4	11	998.35	2.70	2,695.55
5	19	1,210.97	2.36	2,857.89
6	25	1,334.00	2.10	2,801.40
7	10	1,170.23	4.25	4,973.48
8	31	1,530.46	2.32	3,550.67
9	10	763.00	2.37	1,808.31
10	5	383.85	2.54	974.98
11	20	1,173.97	1.89	2,218.80
12	14	1,281.00	2.31	2,959.11
13	20	1,646.45	2.63	4,330.16
14	22	1,246.50	2.13	2,655.01
15	6	872.14	3.35	2,921.67
16	4	1,134.98	2.91	3,302.79
17	9	1,217.41	1.77	2,154.82
18	4	793.40	3.29	2,610.29
19	18	1,404.46	1.95	2,738.70
20	11	1,170.60	2.51	2,938.21
21	11	383.58	1.59	609.90
22	6	699.27	2.20	1,538.39
23	30	1,292.11	1.87	2,416.24
24	17	797.18	1.97	1,570.44
25	10	708.80	1.82	1,290.02
26	39	2,199.72	1.58	3,475.56
27	4	571.24	3.92	2,239.26
28	1	253.10	1.70	430.27
29	8	375.24	1.41	529.09
30	3	375.31	1.66	623.01
31	5	631.61	1.76	1,111.63
32	4	328.31	1.17	384.12
33	2	311.16	1.28	398.28
34	22	770.40	1.31	1,009.22
35	17	3,092.01	1.51	4,668.94
36	9	2,348.20	1.58	3,710.16
37	29	2,000.68	1.00	2,000.68
計・平均	519	42,434.42	2.25	97,478.27

表-3 枝道に関するデータ

枝道	測点数	延長（間）	平均幅員（間）	面積（坪）
1	47	3,379.22	2.13	7,197.74
2	30	2,430.85	2.16	5,250.64
3	28	2,769.42	2.43	6,729.69
4	20	6,452.04	1.51	9,742.58
5	74	3,027.52	1.19	3,602.75
6	69	4,511.57	1.54	6,947.82
7	68	2,900.74	1.38	4,003.02
8	86	4,376.13	1.39	6,082.82
9	64	4,041.63	1.68	6,789.94
10	110	7,135.28	1.40	9,989.39
11	62	3,996.75	1.42	5,675.39
12	21	1,814.19	1.41	2,558.01
13	51	3,053.87	1.20	3,664.64
14	103	4,628.37	1.34	6,202.02
15	67	3,788.84	1.39	5,266.49
16	23	805.01	1.15	925.76
17	76	2,983.80	1.16	3,461.21
計・平均	999	62,095.23	1.52	94,089.91

表－４ 道路種別にみた各居住区の平均幅員

		八 家 上屋敷	八 家 下屋敷	人持組 上屋敷	人持組 下屋敷	平 士 居住区	足軽 組地	本 町	地子町	相対 請地	寺社地	その他	合 計 平 均
幹 道	データ数	2	7	2	12	38	31	52	196	1	26	74	441
	最大値(間)	3.90	4.10	4.52	2.42	4.50	5.32	6.66	6.49	4.66	4.35	4.25	4.65
	最小値(間)	2.00	1.46	2.79	0.60	1.46	0.80	0.99	0.48	4.66	0.90	0.55	1.52
	平均値(間)	2.95	2.56	3.66	1.33	2.35	1.90	3.14	2.29	4.66	1.87	1.22	2.15
枝 道	データ数	1	77	6	42	90	82	0	486	6	33	63	886
	最大値(間)	3.45	2.82	5.50	2.88	5.70	2.50	—	5.35	1.62	2.42	2.02	3.11
	最小値(間)	3.45	0.60	0.69	0.80	0.92	0.55	—	0.37	0.85	0.80	0.55	0.87
	平均値(間)	3.45	1.39	2.62	1.84	1.96	1.35	—	1.38	1.17	1.43	1.15	1.45
全 体	データ数	3	84	8	54	128	113	52	682	7	59	137	1,327
	最大値(間)	3.90	4.10	5.50	2.88	5.70	5.32	6.66	6.49	4.66	4.35	4.25	4.89
	最小値(間)	2.00	0.60	0.69	0.60	0.92	0.55	0.99	0.37	0.85	0.80	0.55	0.81
	平均値(間)	3.12	1.49	2.88	1.73	2.08	1.50	3.14	1.64	1.67	1.62	1.19	1.69

っているものと思われる。そこで街路の沿道居住区の階級別に各指標値を算出した。ただし、一本の街路においてその両側に居住区が異なる場合、各々の居住区に接しているとみなして算出しているため、データ数が増加している。

表－４は街路種類別にみた幅員の値である。幹道については、まず平均幅員をみると、全体としては2.15間(3.91m)になった。これより広いのは八家上屋敷、八家下屋敷、人持組上屋敷、平士居住区、本町、地子町で、比較的武家地の幅員の方が広いという傾向がある。そのうち最も広いのは人持組上屋敷の3.66間(6.65m)である。また、幅員のばらつきは地子町が最も大きく、レンジが6.01間(10.93m)であり、これに対し人持組上屋敷が最も小さく1.73間(3.15m)である。最大値は、本町が最も広く6.66間(12.1m)であり、これにはほぼ同じ幅員で地子町が続いている。いずれも町人地であり、街道など幹道の沿道に立地しているものが多いため幅員が広い。また、人持組下屋敷が2.42間(4.40m)とかなり小さい。最小値は、相対請地の4.66間(8.47m)が極端に大きな値であるが、これはデータが1つしかとれなかったためである。ある程度のデータ数から求めたものはすべて1.5間(2.73m)以内であり、最も狭い幅員は地子町の0.48間(0.87m)となっている。

一方、枝道については、平均幅員はほとんどの居住地が1間(1.82m)台であり、幹道ほどのばらつきもなく、平均が1.45間(2.64m)となった。枝道

でもやはり武家地の方の幅員が広いという傾向がみられる。また、レンジは幹道と同様地子町が最も大きく4.88間(8.87m)、相対請地が最小で0.77間(1.40m)である。最大値では、平士居住区が最も広く5.70間(10.36m)、これに人持組上屋敷、地子町が次いでいる。この3地区がとくに広い。相対請地は1.62間(2.95m)とかなり小さく、1間台はこの地区のみである。最小値では、地子町が最も狭く0.37間(0.67m)、最も広いのが平士居住区の0.92間(1.67m)である。全体の平均は、0.87間(1.58m)で幹道のおよそ半分である。

幹道と枝道を合わせた全街路でみると、各階級別居住地の特徴がより明確に現れていると思われる。平均幅員は、全体としては1.69間(3.07m)となった。八家上屋敷、人持組上屋敷、本町の3地区が約3間(5.45m)程で特に広がっている。この3地区は武家屋敷の中でも高い地位にある居住地、および、北国街道を中心に帯状に広がる上層商人地で、そのほとんどが幹道に面しているものである。その他はほとんど1.5間(2.7m)前後ではほぼ均等であり、平士居住区のみ多少広がっている。最大値は幹道の傾向とはほぼ一致している。しかし、人持組上屋敷のみ枝道の値が幹道のものより広く逆になっている。最小値は概ね枝道の傾向と同様であるが、八家上屋敷、人持組下屋敷が幹道の値が最小値となっている。幅員のレンジは地子町が最も大きく、6.12間(11.13m)であり、場所によってかなりの幅員差があることがわかる。これに対し、データ数の少

ない八家上屋敷を除けば、人持組下屋敷が最小で、その差は2.28間(4.15m)である。この値は他と比較してかなり小さいものであり、この居住区はあまり幅員変化の無い街路であったといえる。

次に金沢の居住階級を大きく武家地、町人地、寺社地の3種類に区分してその道路率を算出した(表-5)。武家地には八家上屋敷、八家下屋敷、人持組上屋敷、人持組下屋敷、平士居住地、足輕組地、町人地には本町、地子町がそれぞれ含まれている。これをみると町人地の道路率が17.1%と高くなっていることがわかる。これは、町人地では宅地規模が極めて小さいことが原因としてあげられる。また、本町は街道・往還に帯状に連なっているため接する街路の幅員が広く、地子町では迷路的な細街路が多いためであるといえる。これに対し、寺社地、武家地においてはそれぞれ5.8%、7.9%であり、道路率は低い。これは、いずれも宅地規模が大きく敷地内に街路がほとんどみられないためである。また、武家地においては街路も直線的な街路構造となっていることにも起因する。

その他の街路形状について居住階級別にみた結果が表-6である。広見数については、街路延長が長い地子町が圧倒的に多く全体の半数近くを占めている。これよりかなり少なくなるが、平士居住区、寺社地が続いている。この3地区以外では全体の1割に達しているものはない。全街路延長との関係でみると、単位延長当たりの広見数では寺社地が1,000間当たり7.45と最も多く、次いで、相対請地、地子町、八家上屋敷、人持組上屋敷となっている。寺社地は、寺院群として藩が計画的に配置したものが多いため、そのような地区では広見も計画的に作られた可能性も考えられる。また、参詣に訪れる者たちによる広場的な目的で発生した場合も考えられる。相対請地はデータ数が少ないため考察から省くが、

地子町については、街路延長が長く幅員が狭く道路率が高いことから、複雑な細街路網を有していたと思われる。そのような地区においては、種々の目的に利用される汎用的な空間が必要とされ発生したのではないかと思われる。広見数の最も少ないのは足輕組地の1.54であり、本町も2.28と少ない。足輕組地は藩主によって計画的に作成された地区であり、格子状の敷地区画線を囲むように直線的な街路が整然と配置されているため、計画的でない不規則な街路のふくらみが生じていないためと考えられる。

坂道は、全長の半分近くが城下縁辺部、山間部等の非居住地であり、次いで、八家上屋敷、八家下屋敷、地子町、寺社地がほぼ1割ずつあり、これらで全体の9割近くを占める。これら以外の居住区ではほとんど坂道は存在しておらず、特に足輕組地、人持組下屋敷、相対請地では皆無である。これはその居住区の特徴の現れであると思われる。

袋小路については、全長は全街路延長の最も長い地子町が3,242間(5,894m)と圧倒的に長く、続いて人持組下屋敷、八家下屋敷の順で次いでいる。また、街道沿いである本町、畦道を継承した街路をもつ相対請地、幹道沿いに多い八家上屋敷の全長は短い。街路延長に占める割合でみると人持組下屋敷が27%と最も大きな値を示し、次いで八家下屋敷、人持組上屋敷が大きい。これは、下屋敷が、幹道沿いに配された大臣の上屋敷の周辺部や城下縁辺部の要所に配されたために、枝道沿道に位置することが多いためと考えられる。平均幅員については八家上

表-5 居住区別にみた道路率

居住地	居住地面積(ha)	街路面積(ha)	道路率(%)
武家地	475	37.62	7.9
町人地	169	28.88	17.1
寺社地	70	4.09	5.8

注) 居住地面積は、島村昇：金沢の町家、鹿島出版会、1983、p.24の数値による

表-6 居住階級別の道路形状の比較

	八家上屋敷	八家下屋敷	人持組上屋敷	人持組下屋敷	平士居住区	足輕組地	本町	地子町	相対請地	寺社地	その他	全体
広見数(個)	11	36	19	26	71	19	11	226	2	57	17	395
単位長当広見(個/1,000間)	4.79	3.75	4.62	3.11	3.09	1.54	2.28	5.12	5.20	7.45	1.62	3.78
坂道全長(間)	204.00	184.16	20.00	0.00	104.52	0.00	56.00	211.43	0.00	195.50	831.38	2,171.65
袋小路全長(間)	103.00	1,189.50	492.00	2,263.39	934.15	825.70	0.00	3,242.05	18.00	532.84	276.00	14,054.46
街路長に占める割合(%)	4.49	12.38	11.96	27.06	4.07	6.71	—	7.35	4.68	6.97	2.63	13.45
袋小路平均幅員(間)	2.91	1.67	1.11	1.71	1.50	1.25	—	1.12	—	1.67	1.44	1.31

表－7 道路を挟んだ居住区の隣接関係

単位：間

	八 家 上屋敷	八 家 下屋敷	人持組 上屋敷	人持組 下屋敷	平 士 居住区	足輕組地	本 町	地子町	相対請地	寺社地	その他
八家上屋敷	657.74	642.00	118.61	93.00	454.50	—	—	243.65	—	86.00	—
八家下屋敷	642.00	5,813.61	506.09	593.00	846.75	—	—	909.40	38.00	256.74	—
人持組上屋敷	118.61	506.09	546.00	452.35	1,909.60	241.07	—	329.70	—	9.00	—
人持組下屋敷	93.00	593.00	452.35	4,835.89	831.74	296.91	—	1,106.26	—	155.15	—
平士居住区	454.50	846.75	1,909.60	831.74	13,109.97	966.49	155.35	4,049.74	—	627.50	6.00
足輕組地	—	—	241.07	296.91	966.49	7,671.09	82.00	2,429.92	67.04	549.14	—
本 町	—	—	—	—	155.35	82.00	4,581.67	—	—	—	—
地 子 町	243.65	909.40	329.70	1,106.26	4,049.74	2,429.92	—	32,140.34	37.89	2,749.80	142.50
相対請地	—	38.00	—	—	—	67.04	—	37.89	229.00	13.00	—
寺 社 地	86.00	256.47	9.00	155.15	627.50	549.14	—	2,749.80	13.00	3,179.31	22.50
そ の 他	—	—	—	—	6.00	—	—	142.50	—	22.50	10,328.52
合 計	2,295.50	9,605.32	4,112.42	8,364.30	22,957.64	12,303.66	4,819.02	44,139.20	384.93	7,647.88	10,499.52

屋敷が2.91間（5.29m）と最も広いが、他は多少のばらつきがあるものの 1.1間（2.0m）～ 1.7間（3.1m）の範囲内である。

6. 階級別居住地の隣接関係

幹道・枝道における沿道の階級別居住地の隣接関係を、組み合わせごとの総延長、頻度順位、居住階級別の他居住区との隣接距離について整理した。表7、8にそれらの数値を示す。なお、表中の距離はすべて街路の延長距離であり、居住区の隣接距離についても、街路をはさんだ隣接関係のみにについて扱っている。これらにより階級別居住区間の関係を考察する。

（1）居住階級の隣接関係とその距離

表－7によると、八家上屋敷は八家下屋敷との隣接距離が最も長く、次に平士居住区となっており、武家地との隣接割合が高い。街路延長合計は8番目であり、居住区規模が小さいことが影響している。八家下屋敷では、地子町が最長であるが、以下4地区とも武家地であり、八家上屋敷と同様武家地との隣接が多い傾向がみられる。

人持組上屋敷は、武家地との隣接割合が特に顕著であるといえる。人持組下屋敷では、地子町との隣接が最大であり、以下4地区が続けて武家地で、その傾向は上屋敷と類似している。

平士居住地は地子町との隣接距離が特に長くなっている。また、他の武家地との隣接も長く、街路延長合計は2番目である。これは、居住地面積が広いためと思われる。足輕組地でも平士居住地と同様地子町が特に長く、八家上屋敷、八家下屋敷との隣接

は皆無である。

武家以外の居住地では、まず本町は全居住地の中で最も隣接居住区の数が少なく、平士居住区と足輕組地の2地区のみである。これは、ほとんどの地区が街道の両側に沿って形成された地区であるため、他の居住地との隣接関係がなかったためである。これに対し地子町は全街路延長も長いと、本町以外のすべての居住区と隣接しており、その延長距離も最も長くなっている。相対請地は延長距離が最も短く、各地区毎の値もすべて100間（182m）未満となっている。寺社地は、地子町と同様、本町以外のすべての居住区と隣接しており、中でも地子町の値が特に長い。その他の地区は、城下縁辺部、山間部等の非居住地であることから、本町に次いで隣接居住区が少なく、平士居住区、地子町、寺社地のみである。また、その合計も極めて小さい値である。

（2）隣接組み合わせの延長距離

各居住区間の隣接組み合わせ、延長距離をみると、最も長いのは平士居住区・地子町の両居住区に沿った街路延長が4,050間（7,863m）、次いで地子町・寺社地の組み合わせ、足輕組地・地子町、人持組上屋敷・平士居住区と続く。上位の組み合わせに地子町、平士居住区との組み合わせが多いのは、前節の分析とも一致するものである。この4つの組み合わせだけで全体の半分を占めており、金沢城下において、街路を挟んだ居住区間の隣接関係の半分はこの4つの組み合わせということになる。

（3）階級別の隣接状況

階級別居住地の街路延長、その居住区のみに沿った街路延長（単独距離）、他の居住区との隣接距離

と割合について分析した(表-8)。階級別街路延長は居住地によって異なり、最も長いのは地子町で全居住地のおよそ35%を占めている。これに対して最も短い距離は相対請地で全体のわずか0.3%にすぎない。居住地別の隣接距離をみると(図-3)、およそ3つのグループに分類される。とくに長い地子町、平土居住区と、とくに短くほとんど他の居住地とは隣接していない本町、相対請地、その他の地区、残りの6地区は4,000間(7,272m)前後の地区となっている。

次に、街路延長に対する隣接距離の割合に着目する。全体の平均値は34.6%であり、街路延長の3割強の街路部分が異なる居住地と隣接している。そのうち、人持組上屋敷が最も隣接する街路距離の割合が大きく、86.7%である。これに八家上屋敷が71.3%で続いている。どちらも上屋敷であり、またその街路構造も類似している。すなわち、一区画の宅地面積が比較的大規模で散在しており居住区が単独で街路を形成していることはなく、そのほとんどが他の居住区に囲まれた形となっているからである。これに対し、その他の地区及び本町の割合は1.6%、4.9%と極めて低い値となっている。これは、まずその他の地域では、犀川、浅野川の両河川や城下の縁辺部、卯辰山など他の居住区が存在しない地域であるためであり、また本町はそのほとんどが北国街道沿い両側に沿って帯状となっており、そこでは他の居住地を全く含んでいないためである。これら以外の居住地では、地子町、寺社地がいくらか差があるものの他の八家下屋敷、人持組下屋敷、平土居住区、足軽組地、相対請地の5地区はすべて40%前後となっている。

7. まとめ

本研究では、城下町金沢における藩末期の街路構造とその空間的特性について、街路の種類、形態、沿道の居住地種別を指標として集計、分析を行った。主な結果を以下に示す。

①金沢城下の街路網は37本の幹道と17網の枝道に分類されている。金沢の街路の骨格ともいえる2街道3往還は金沢城を中心に放射状に拡がっている。他の幹道は城を幾重にも環状に囲んでおり、その間を縫うように、枝道が中央部では一定のまとまりごと

表-8 居住区別の沿道の距離と隣接割合

居住区	沿道全長(間)	単独距離(間)	隣接距離(間)	隣接割合(%)
八家上屋敷	2,295.50	657.74	1,637.76	71.3
八家下屋敷	9,605.32	5,813.61	3,791.71	39.5
人持組上屋敷	4,112.42	546.00	3,566.42	86.7
人持組下屋敷	8,364.30	4,835.89	3,528.41	42.2
平土居住区	22,957.64	13,109.97	9,847.67	42.9
足軽組地	12,303.66	7,671.09	4,632.57	37.7
本町	4,819.02	4,581.67	237.35	4.9
地子町	44,139.20	32,140.34	11,998.86	27.2
相対請地	384.93	229.00	155.93	40.5
寺社地	7,647.88	3,179.32	4,468.56	58.4
その他	10,499.52	10,328.52	171.00	1.6
合計・平均	127,129.39	83,093.15	44,036.24	34.6

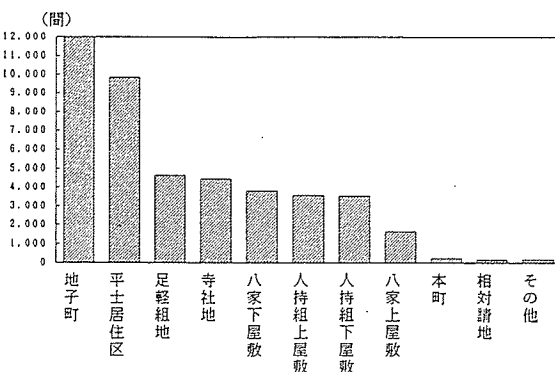


図-3 居住区別の隣接距離

にはほぼ格子状に整然と、川沿い、城下末端部においては曲がりくねった複雑な形状で構成されている。

②幹道の平均幅員は2.25間(4.09m)で、城から遠くなるほど狭くなっている。枝道は幹道の約2/3の1.52間(2.76m)と狭く、全体にばらつきも少ない。幹道の街路延長は枝道の約2/3の42,434間(77,149m)で、街路面積にして幹道、枝道ほぼ同等の面積を有しており、全域の道路率は約7.9%である。

広見数は、単位長あたりの数は幹道の方が1,000間あたり4.10箇所と枝道の3.56箇所よりやや多い。坂道は全街路延長の約2.1%を占め、その平均延長は幹道のものの方が長い。平均幅員は1.33間(2.42m)と一般道路よりも狭い。また、袋小路は枝道にのみ存在し、全街路延長の14%を占めている。平均幅員は1.31間(2.38m)と狭い。

③階級別居住地との関係でみると、街路幅員は上級武家地や、街道沿いの本町で約3間(5.45m)と広い。また、道路率は町人地の方が17.1%と高く、敷地規模の大きい武家地、寺社地でそれぞれ5.8%、7.9%と低くなっている。

広見数の単位長あたりの数は、居住地別では、寺

社地が7.45箇所、地子町が5.12と多い。坂道は居住地には少なく、全長の半分近くを非居住地在が占めている。また、袋小路は地子町に多いが、街路延長に占める割合をみると、人持組下屋敷が27%と高い。

居住地の隣接関係は、上級の武家地は他の居住地との隣接割合が高く、特に武家地との隣接が多い。他の武家地は地子町との隣接が多く、全体的にみても、平士と地子町との隣接組合わせの割合が高い。本町は街道の両側に面している場合が多いため、他の居住地との隣接割合は低い。

本研究は、藩政期の測量図を用いて藩末期の街路構造について分析したものであり、それまでの金沢の成立経緯やその後の街路構造の変化等に関する分析は行っていない。既存の街路構造を街路整備計画に反映させていくためには、今後、こうした分析が必要と思われる。なお、本研究を進めるに際して金沢工業大学増田達男助教授の協力を得た。また、資料の調査、分析に際して、金沢大学工学部土木建設工学科旧4年生、北村浩一、加藤晴久両君の協力を得ている。ここに記して感謝いたします。

補注

- 1) 市街地における道路という意味で本研究ではすべて「街路」を用いる。
- 2) 矢守一彦：『城下町のかたち』，筑摩書房，1988，pp.17-84、矢守一彦：『都市プランの研究』，大明堂，1970，pp.247-285、矢守一彦：『城下町』，学生社，1990
- 3) 注2)『都市プランの研究』p.284
- 4) 注2)『都市プランの研究』pp.322-327
- 5) 一連の研究として、油浅耕三：正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察，都市計画別冊20号，pp.7-12，1985、油浅耕三：正保城絵図による城下町の集住地域における道路幅の特質，都市計画第136号，pp.81-87，1985、油浅耕三：正保城絵図による城下町の道路の交差形態と交差点密度に関する考察，都市計画第167号，pp.89-99，1991がある。
- 6) 島村昇：『金沢の家並み—近代文学に見る原風景—』，鹿島出版，1989
- 7) 後述資料に描かれている地域を金沢城下全域とした。

- 8) これらの資料はいずれも石川県立図書館蔵のものである。
- 9) 資料の中では測点のことを舎点と記されているが、本論文ではすべて測点とする。
- 10) 幹道は城下町の幹線街路であり、枝道はそこから分岐した支線とみられる。
- 11) 街路中心線が必ずしも中心部を示してはいないこと、放射状の測量データの場合、特殊な片側の幅員のみしか計測できず、両側の幅員を求めることができないことによる。
- 12) そのため、道路端部に測点のない場合は、正確な全長とはいえないこともある。また、袋小路についても小さなものについては測点が無いこともあり、そのようなものは分析の対象から除かれている。
- 13) 金沢市：『稿本金沢市史』，金沢市，1973
- 14) 「広見は街路の交叉点のところが小広場のように広がっているところのことである」「長方形や正方形の場合は柵形といっている」(注5)の文献pp.224-225参照)とあるように、金沢には街路の一部にふくらみをもった部分が数多くあり、それらを総称して広見とよんでいる。
- 15) 藩政期の金沢の身分制度とその居住地区については、田中喜男：『城下町金沢』，日本書院，1969，pp.32-58に詳しい。それによると、武士については、八家といわれる家老クラスの直参を筆頭に、人持組といわれる高禄の家臣が70家あった。さらにその下には、家臣をもたない直臣の武士である平士がいたがこれもいくつかの階級に分かれていた。また、八家と多くの人持組は、自分達の住む上屋敷とは別に家来である陪臣を下屋敷に住ませた。足輕は武士に仕える階級であるが、藩では城下縁辺部等の要所に足輕組地を設けそこに住ませた。町人については、上層商人の住む本町と地子町に分かれ、本町は最上の町格にあり、地祖である地子銀を免除されていた。相対請地は、城下町の膨張において城下中心部からあふれ出た武士や下級労働力を提供する町人が農民との間で行われた個人間の貸借関係にある土地である。寺社地は寺社がある地区であるが、その門前町である寺社門前地は、寺社の所有する土地に居住する町人が寺社に対して地子を納めた。また、金沢で

は軍事的目的により、寺を集積して寺院群を形成する地区が数箇所存在する。

16) 金沢工業大学旧島村研究室作成

17) 注2)『城下町』p.188

18) 田中喜男：『わが町の歴史 金沢』，文一総合出版，1979，pp.70-79 にその経緯が詳述されている。

19) 注15) 参照

20) 島村昇：『金沢の町家』，鹿島出版会，1983，p.24 のものを用いた。

21) 藩政期の居住地区分に関しては、種々調査されており、階級別居住地図を示した文献もいくつかみられる。たとえば、注15)『城下町金沢』，p.296、田中喜男他：『伝統都市の空間論・金沢』，弘詢社，1976，P.58、『金沢市文化財紀要 105，金沢の歴史的建築と町並み』，金沢市教育委員会，1992.3，P.9 などがある。本研究においても藩末期の資料をもとに詳細に調査した地図を用いているが、紙面の都合上省略している。